

川嶋 麗華 提出 学位申請論文

『火葬をめぐる民俗学的研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

川嶋麗華の学位申請論文「火葬をめぐる民俗学的研究」の内容の要旨は、以下のとおりである。日本の各地では、かつては土葬による遺体処理がさかに行なわれてきたが、高度経済成長期（一九五五―一九七三）を経る中で火葬が広く普及し、現在では日本の葬法の100%近くが火葬となっている。その変化は、単純に土葬から火葬へという遺体処理の方法の変化だけでなく、それに関連する技術や職能の変化をとまなうものであった。本論文は、火葬の担い手と技術を中心として、主にノヤキなどと呼ばれる集落ごとの相互扶助の慣行のもとに行なわれてきた火葬と、一定の職能者への委託によって行なわれてきた火葬と、その火葬の実態の把握、そして、その伝承と変遷の動態を民俗学的に分

析することを目的としたものである。そこでまず、民俗学的研究というその意味について、民俗学とは民俗伝承を分析する学問であるにとらえ、伝承されている習俗には、伝承され続けている“変わらない側面”と、変遷していく“変わっていく側面”の、その両面があり、民俗学的に分析するとは、それら「伝承 traditions」と「変遷 transitions」の両面のありようを分析することであるとまずは位置づけている。

第一章「ノヤキを伝えてきた村」では、二〇一一年まで集落単位でノヤキの火葬を継続していた広島県旧大朝町筏津地区の筏津上講中に注目し、ノヤキを継続したその背景と、講中による葬儀を継続するための地域社会の取り組み、について分析を行っている。これまでの研究では、公営火葬場と集落との距離的な遠近によって、公営火葬場の利用に遅速の差が生まれることが指摘されてきた。しかし、筏津地区における生活の変化や葬儀の変化についての観察から、その地域社会が長く守られてきているその社会生活を維持しようとする論理で、公営火葬場の利用の採否について選択が行なわれていたことを指摘して

いる。本章で取り上げた筏津上講中では、火葬を含めた葬儀の一切を講中が担うという伝統と、講中自身がその存在意義を維持継続したいという指向性によって、ノヤキが継続されていたとしている。そして、高度経済成長にともなう構造的な生活変化の中にあっても、講中での葬儀を継続するということを目的とした地域の対応として、その地域社会ではJAをはじめとする新たな葬祭業者の提供する葬祭サービスをセットで一括して受容するのではなく、業者による葬祭サービスの内容の一つ一つについて受容するか、それとも地域でその部分は補填して対応するというかたちで、講中による自主的な選択が行なわれていた。たとえば、旧大朝町域の筏津上や胡町では地区のコミュニティセンターを葬儀場として利用しており、JAの葬祭場の利用ではなくそれぞれの講中が自分たちで葬儀場を確保することで講中中心の葬儀が崩れることを防いでいるものと観察された。そして、生活変化の大きな時期には、社会環境の変化に対して先取的にこまめに対応してきている講中の方が、伝承維持の力が強いという傾向性を指摘している。

第二章「野焼場における火葬の方法と担い手」では、北は青森県から南は鹿児島県までの全国各地のノヤキに関する調査報告資料を参考にして、それに岩手県、富山県、静岡県、愛知県、広島県などの各地では自分自身の現地調査をもとにして、全国的な視野でノヤキの習俗の実態とその動態について分析を試みている。そして、ノヤキには、①藁や藎を使う蒸し焼き火葬、②薪を主に使うコログシヤキ火葬、の二つのタイプがあり、そのうち①蒸し焼き火葬は、伝染病などの時に臨時的に火葬を行なう地域を含め、全国的に広く見られる技術であったことを指摘している。そして、①②いずれにおいても、生活燃料であった藁や薪を主な燃料として、近代以降に主に都市部で火葬炉が開発されて以後も、ノヤキを伝えていた地方の多くの村落ではかつての火葬炉ではない簡単で素朴な火葬施設が用いられていた。高度経済成長期（一九五五―一九七三）とその前後には、たとえば、A従来の非火葬炉をレンガなどで改修する地域（富山県の上岩瀬）、B新しく火葬炉を設置する地域（富山県の触坂）、の両者があり、各地区で古くからの非火葬炉のノヤキの維持か、新たな火葬炉の受容か、その

選択が行なわれていた。石油燃料を用いる火葬炉を導入した少数の事例を除いて、いずれの場合も藁と薪を主な燃料とする火葬が継続されており、生活燃料の変化と火葬燃料の変化はそれぞれの変化を経ており必ずしも密着連動した相関関係にはなかったことが指摘されている。その火葬の担い手には、血縁的関係者や地縁的関係者による相互扶助的な火葬と、専門的職能者による業務委託の火葬とがあったが、後者の平成初期までノヤキを継続していた愛知県旧八開村域では、火葬の役が歴史的に専門職能者の権利として地域社会でも相互に了解されていたことを追跡し確認している。そして、そのような相互関係の伝承が、この地域でノヤキが継続していた要因の一つであると考察している。

第三章「近代以降の火葬場の普及と火葬炉の成立」では、近代以降の火葬炉と火葬場の普及の概略を整理するとともに、三つの火葬場の調査事例と、うち一つの火葬場の利用地域における火葬の変化について比較を行なっている。高度経済成長期には日本各地で自治体によって公営火葬場が設置されたが、それよりも早くから人口増加が起っていた都市部及びその近郊区においては、自

治体に先行して地域の有力者などによって民営火葬場が設けられてきていた。それらの民営火葬場の多くは、戦前までに買収などによって公営火葬場へととなっていたが、現在も民営火葬場として地域の火葬を担っているところもある。そのような火葬場は、公営火葬場の代わりに、または公営火葬場が対応しきれない需要に応じるかたちで多くの火葬処理を担ってきた。三事例の火葬場では、いずれも時代にあわせて新しいものに改修されて、薪から石油燃料やガスへと火葬燃料が変化したこと、火葬の技術は、現在は火葬炉へ棺を納める作業から骨拾いの準備までの一連の火葬作業の多くを機械で制御するようになってきているが、火葬の担い手は経験とそれによる技術の習得が求められ、それが現場ごとに実践されていることを追跡している。

第四章「両墓制地域における火葬の受容」では、サンマイと呼ばれる埋葬墓地とそれとは別にハカと呼ばれる石塔墓地を設ける両墓制の形態での土葬を伝承してきた福井県大飯郡の大島地域における高度経済成長期前後の土地開発と葬送習俗の変化を追跡し、この地域における葬送習俗の変化を生活変化の中に

位置づけることを試みている。原子力発電所の設置にともなう急激な開発によって、従来のような海上の船便ではなく陸路による他地域との移動交流が可能となり、順次火葬へと移行していった。そして、一九七〇年代以降の火葬の受容にともなってサンマイに埋葬することはなくなったが、現在でも夫婦墓の墓石をもつ家では依然としてサンマイへの埋骨を行っており、家単位の墓に変化した家でも花輪や卒塔婆が古いサンマイに投棄されており、サンマイの利用は部分的に継続していることを追跡している。また、かつて埋葬時に利用していたソウレンカイドウと呼ばれる地区ごとに決められていた、喪家からサンマイまでの野辺送りの小道で、小銭の散布や霊柩車への積載をしており、かつての葬列等の習俗の構成要素の一部を残し継承している点にも注目している。そして、民俗伝承の変化は事例ごとに相異はありながらも段階的に時差を含みながら展開するものであるという特徴を指摘している。

終章では、第一章から第四章までの論点についてあらためて、(一) 村落におけるノヤキの実態、(二) 火葬炉の成立と火葬場での火葬習俗の実態、(三) ノ

ヤキを残した地区における葬送習俗の動態とその伝承上の力学関係、(四) 土葬習俗地域における開発と葬送習俗の変化との伝承上の力学関係、(五) 火葬場での火葬の受容に連動した葬送習俗の変化、(六) 野焼場と火葬場での火葬とその伝承と変遷、のそれぞれについて整理している。そして、旧来のノヤキにおいては、火葬は講中などの地域の人々や専門的職能者などによって担われることが一般的であったが、そのような中であっても点火と拾骨は家族に行なわれることが多かったことから、それは葬儀がもともと家族や親族が行なうものだとする社会的規範が存在していたからだと述べている。近年では、点火が火葬場職員の役割となっている例も多くなってきており、家族や親族による遺体処理の役割が拾骨のみという一つの動作に集約されてきている傾向があることにも注目し、高度経済成長期以降の大きな社会変化に連動して、火葬においても技術、担い手、場などに大きな変化が生じたが、そのような大きな変遷の中においても、拾骨の儀礼など重要な要素は伝承されてきていることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

これまで民俗学の論文の中には、民俗学とは何かという基本を説明することなく、結論としての論点の明示もないものがままあったが、本論文はそれを明記している点がまずは評価される。民俗学とは民俗伝承について「伝承 traditions」と「変遷 transitions」の両側面を一体として分析する学問であるという申請者なりの姿勢を提示している。本論文は、ノヤキ（野焼き）と呼ばれる村落部で伝承されてきた火葬習俗を中心として、近代以降の火葬についてのその民俗学的な研究を試みたものであるが、とくに、現地調査に基づき、日本各地における火葬の伝承と変遷の動態に着目した点が評価できる。要点を絞れば以下のとおりである。

(一) これまで研究対象としての注目が不十分であった日本各地の火葬習俗について、詳細な現地調査を主として民俗調査報告書の類も参照しながら、とくに村落部で伝承されてきていた旧来のノヤキの伝承実態を全国的に捉えようと

した。ノヤキには、青森県の一部地域等では①薪を主に使うコロガシヤキ火葬が行なわれていたが、その一方、愛知県愛西市をはじめとして②藁や藎を使う蒸し焼き火葬が全国的に広く行なわれており、遺体をきれいに骨化されるための技術が各地で継承されていた、それらのことをよく追跡している。

(二) 自身の具体的な調査事例から、各地における火葬習俗の動態について分析を行ない、火葬をめぐる伝承と変遷をていねいに追跡している。そして、以下のような指摘を行なっている。高度経済成長期（一九五五―一九七三）における大きな社会変化の中で、各地区で旧来のノヤキのための野焼場の改修が行なわれたが、その改修には、愛知県の上東川のようにA従来の非火葬炉を煉瓦等で改修する地域、富山県の触坂のようにB新しい火葬炉を設置する地域、の両者があり、各地区でノヤキの維持か、新たな火葬炉の受容か、その選択が行なわれた。高度経済成長期を経る中で、日本各地の村落部において新たな火葬炉を利用する公営の火葬場の利用へと移行する大きな動きが起こったが、たとえば、広島県北広島町や愛知県愛西市などの一部地域では、平成の前半までノ

ヤキを継続した地域があった。二〇一一年までノヤキを継続した北広島町の上
筏津地区では、公営火葬場が設置された後も地域の人々の自主的な選択によっ
てノヤキを継続していった。一方、愛西市の地区では、歴史的に火葬を担っ
てきた専門的職能者の従来から権利についての相互理解のもとで、平成に入っ
てからもノヤキが継続されていた。高度経済成長期を経る中で起こった全国的
な新たな公営の火葬炉利用の火葬場の設置にとまなう火葬の普及、その火葬場
の受容による旧来の土葬習俗の変化や喪失、などに民俗学の研究関心が集まっ
ているが、その中で本論文はこのように現場調査の蓄積の中でその変化の動態
の多様性をよく追跡できている。

(二) 旧来のノヤキの野焼場と新たな火葬炉の火葬場の、両者における火葬習
俗の比較から、その伝承と変遷の動態に注目して分析を試みている。そして、
近年では点火が火葬場職員の役割に変化する傾向があるが、ただし拾骨は依然
として家族の役割とされており、拾骨の部分がより強く「伝承」されている。
火葬の担い手が変化しても、点火と拾骨は家族の役割とされてきたことから、

遺体処理の責任は基本的に家族にあったこと、その責任が近年では拾骨のみに集約されてきている傾向があること、などを指摘している。

こうして評価できる点がいくつかある一方で、残されている問題点も少なくない。その一部をあげておくと、以下のとおりである。

(一) 本論文は、近代以降、現代までの火葬習俗についての傾向とその変化について取り上げているものの、近世までの火葬の歴史的な展開がまだ充分には追跡されていない。葬送習俗の伝承と変遷についての歴史的な追跡も今後に向けて望まれるところである。

(二) 火葬と浄土真宗との関係についても、必ずしも浄土真宗の信仰と火葬が一緒になっているわけではないことを指摘しているものの、火葬の分布域の意味についての論究がまだ示されていない。

以上のように、評価できる点も多くありまだ残されている問題点もあるという段階の本論文について、総合的な観点からすれば、これまでの民俗学における葬儀についての研究は、土葬習俗を中心として行なわれてきており、その

一方で、集落ごとに伝承されてきていたノヤキの習俗については、ほとんど研究対象として取り上げられることのなかった課題であった。そのような中で、具体的な各地におけるノヤキの習俗について、詳細な現地調査にもとづく報告を行ない、それをもとに火葬の伝承と変遷の動態について追跡し、細部についての分析を行った点は十分に評価することができる。よって、本論文の提出者、川嶋麗華は、博士（民俗学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

令和元年十二月四日

学力確認担当者

主査	國學院大學大学院客員教授	新谷尚紀	印
副査	國學院大學教授	小川直之	印
副査	國學院大學教授	大石泰夫	印
副査	國學院大學准教授	飯倉義之	印

川嶋 麗華 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（民俗学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和元年十二月四日

学力確認担当者

主査	國學院大學大学院客員教授	新谷尚紀	印
副査	國學院大學教授	小川直之	印
副査	國學院大學教授	大石泰夫	印
副査	國學院大學准教授	飯倉義之	印